歌文用例

へ 2
5648
1

南へ2
號 5648
卷 1

歌
二百三十三
冊號
函

歌文用例

○同系

○安伊宇衣おの系

○あぐ　初丁　えがト

あそぶ　二丁　あげて　三丁　○いく

いかゝ　四丁　今とかも　五丁　いやしげなる詞

くまもり　六丁　いさわり　七丁　○　年を二つ三つ

文との差別　九丁　思ひぐるあき

おぼ　十丁　蒲萄　十一丁　おのの系

○丁位九家古の系

○かもわかりて　かへうて
神さらひ　賀茂やりて　賀茂
川を　十四　賀茂
が　かゆ　十六丁
河ぐるしき　十八丁　きこゆ　二十丁
○今もとかも　廿二丁　○ぐるしき　○くるべくるしき
出やぐれ　廿二丁　越と　小麓
○佐志須西曽が　孝子
○さく　廿三丁　○〳〵　ゆき　すぐるふ
○すく　廿四丁　海好る
○せうそこぶれる　廿五丁　○そひそこ　廿五丁

そへうそ　そけうこ　廿六丁
そうま　廿七丁　赤ぐちて
そこうる　赤
○多池都豆登が　そやも
○だよ　廿九丁　たのめたる　三十丁　赤ぐる
的ける
○てすだたる　廿二丁　○例く　たまるなる　廿一丁
○ぐくうるふとが格　ぬるとぬ　廿三丁
少ぐそ　廿六丁　少ひとる　廿四丁
少ぐみる　廿七丁　少て　廿五丁
○南仁奴祢能が　皮ぐち

○なりぶりさまの語 廿八丁
なるる 廿九丁 ○ゑ 四十丁
庭もせ ○のこ
○破荒布反保は緣
○もて〳〵 四十二丁 春を迎ふる
春やきあらん まつきこけると 四十四丁
○人は名をさていふ事 四十七丁
○紐 ふる 舊 文は詞を飾るよりもむしろ 四十九丁
ふるこのかしこのかしこのやし 五十丁
○第義年兎毛は緣
○まも〳〵 五十二丁 まもせし 五十三丁 まもと

多門
庭はれも
野もせ 四十三丁
はりし 四十三丁
付ふ
ひるぶる 四十六丁

まぐひまぐひ 五十三丁 まぐへふまぐる ○こ
こゝのいひきはあふまいよ紫 見ゆふをて 五十六丁
見んとまふ ゑせて そぎると 五十七丁
こゝをいつまふぐれ西は音よりひかるふ事
道ゆきぶる ○むふ 五十八丁 ○もぞもこそ
拍ふ 拍ふし 六十丁 拍ふしき 六十丁 ぐ〳〵ぐまりは
○耶以由延豫は緣
○や 六十二丁 行の数のるよりぐわるる
やらん 六十三丁 やがて 六十四丁 ○夕はいひる多 六十五
○ 西多ふ 六十六丁 ○日はゝこ

よりて
○羅漢累例霧の條
○ふるしぐさ　ぬ河　六十七丁
○和尚有恵遠の條

目録畢

人い今きしかってけうこびいきあいとといつも
いひかるゝ人みぐりあり、

○いのかぐこと　といの話

田舎のうた生いのかぐこと　いのかぐこと　みぐりあり　いのかぐこと
京より下る田舎人のうれ仕事をさせていま
名あり、古今集より　ぬ　いのかぐ　見えず出て
しゆとあるも、この樣よりて下るつきて、其
但し、三河生きうているうの道　とうよう、
古仏生たり、田舎ときうの仏　妻　かぐ　む

俗日記に、あるひとの、けうぐ社四ツ谷にまゐりて、
けうぐ、書をよみたる社の由をきゝて、いつ頃、大くらきたる
舎をいつる例なり、

○けうぐとゝいふ詞、よう世にいふけうぐ、雑俗にいふけうぐ、
今世人は文字、いつこゝもいまだ地名をきゝてうまく
くゝとけうぐとかくけうぐ、漢文の梗の字より梅
まで誤まり、梗の字をけうぐとよむ、又、人
は弟子よりて梗を学ぶことを、某大人の門に

あるべきもの、かくあるべきにもいとゞ、門も溢まり、
よとゞく、物をふまえ、文字ぶりにいひて、
粉かゝをまるゝ物なり和漢さまざまかし、

○けうづ橋といふ詞又はけう

今世世の人、江戸よりゆきて、或は、あつまに橋
かけるを、或は武蔵国にてかけたるをみるごとに、
あれは、江戸にいふ名をかりて、俗にやうにて出してある
まで、地名をかりて久あるむきもあり、江戸
きゝていつこゝにも、江戸にかくこゝろ

古 いく
我ぬれて久しき袖
住吉の岸の浪松

けまこそよけれ。ことばのうつくしいてもよろしきハ、
ひづ海とハいふべけれ。けまどそうまるまれ、そうこそ其所を
さうしてよろしけれ。さるこんいろ、ことこそ武蔵国とて
ハ、なるこそ、今ハ天の下に二つあれ大江戸
なるこそ、其名をおきて、ほれ名をもいふべき事
なれ。ひとつ、ことばハ、黄ばみ人と来るこのほうを、ほ城と
ハいふべきなり。

○いくとかいふ詞 いくと、いくく、
いくハ其数の知れざるを、うたがひて問ふこの詞なり。

紫式部日記
はるかにも花の流れのいくとかは
かげさそふらん
年ふるまでもわれぬまれ
身にいくとせ春をすぎ
あれば数ぎ

上下共数、てよをけのたくびすぐ。其ことをもつて
よるべきなり。とある。近世人をたづ、多くさいとくれ
めていくそ世をどいふ。そ世代数の多きさまに
定めてよるハひづるるうつくそ世とりはハそ世の
数のおほぐるをいくそばうれ。そ世ぐと思ふる
まれ。但しいくそ世もまどいくだ。もて数の多き
ことをもいふ。ハ其をてハ、ありがてしおを
今の世ていふ、平語にもよくなるまて事ぐこ、
屋くハ百代数をいふ。ほいくのもとの人ハ、日をかき
移くれ、ほきちとる。もといそぐ、たづいくとれを

いとよ

古 もゝしきの大宮人の朝ゆ
我が見しいとよ
世人の
秋

ひさかたの月の桂
あはれ
あらしの
あらし

また八其数のあらはを結びて、四の詞とかゝるべし、
あはをりつていとよのつゝひざ毛をゝ
べし、

○いとよとかゝる詞

いとよの数くさ毛ゝ
なるとゝ毛毛ゝ、或ハ花の数をいとゝ八の
をいとゝ
いとよもるゝ八たゞ
なり、

今もかも

古 今もかも咲匂ふらん
ゝ
山ゝの

○今もかもとかゝる詞は

あれハ今ゝ人ゝ
ハいづまもゝ
よゝゝ
といつゝ
ゝ

○いやしげゝ字ゆゝる詞ども

花よりも
松ひとり

花ゝ
まぐひ

月ゝ
月ひとり
思ふ

さくぬぐと
ちくぬぐとはさぎうの
小松歌武事ちは
ひまみかてねう

ゆづくりと
歌ぐら思ふ松を
ゆづくりと神ぐ今
庭の松風
わもひきや
思ひきや秋の松風の
宮ひきも様きき秋
ひとの神んと
おりいまと
思ひきや歌のこと伝
山里を垂と約人も
立て向ひく

おもく、物といふこと、中しく家ゆくより、名殘まるに、
今年もまいるべきの人よりしに、どそうりにはもとも
なりよ、皆、ちつまきこと、ちつめでたく
めづくるるを、千年、あまりみづりと多くよ、故
よ、うくはく、月西、月をひて、月をへてといふべし、
あはそひてとつ、旁ひかるるなどいふ人、さうへ
前年、結をへてとぶいつる、思ひきあとつのべきを、
おりづくよとつひて、皆ずあくと思ふ、ひぐあくより
思ひきやハるとうかれて、思ひどよハ今ぬるて、
ととを、矣、ゆる、物をや、

用例上

○いさをとちからとかくあと

序などの終りにいふまことをとやうにむかしは
漢文ばかりにいふまことをとやうにむかしは
かくこそ河内ばかりまぐてまく
いさかふてもかれほど文ばかりをばまぐ
なくこそ世の人おほけれ文のさかをばをばげえもぐ
なぐちしぐるるに漢文の河つさを用ひく
まざるかはかくもぐ見者しさまざまし
雅言をもちげんまい中くこもち漢文はかり

存ぜ亮淫ぶかく、
いさをの仮字三
代実録のこと、
貞観紀竟宴の序
ふもかくかりの歌、
直音霜祢清蚕、
日臣命とよめる
伊佐遠志久多
陀斯岐漁知乃、
於年処斯佐斗
互曽和載那毛、

まくんよりハ俗語をもむきうけたるあ、

○いさをしの

近世おろかなる人、台もてなる、功字をいさをし
とよめるみづからはかくもなれあやまりなり、
いさをとものふぐ正しさをいさをとよむハ言
をはくるかてて、用ふいふ附のもとをもつかを躰と
いふ附ハいさをなり、聲をハ意を躰といへハ
なるをおひとものふハはくるかて用ふいふ附は
おくていさを技いさをとよむもあれと同格

此詞の、為仁ば、驚といふ時、いさゝか、ひりゐ
いつゞき式、ゆきまーあるといそんハ、恵をたゞと
いふを、さひしきをとゝもに同じひがごとも、又
俗字も、三代実録の中に、宣命に、ゆきを
ゆる事、城を因。とかく、是も誤なり、

○いとゝ詞 いとゝきー、いとゝあり、
ものゝよれのごとく、

いとゝつゝひ、ゆうけあるゆゑ、殆へバ、いと、恵しい
恐しー、ものゝ、ハ、為を因ー詞、ものゝ、れを、
いとゝ、ものゝ、ハ、ものゝ、ものゝ、ひて、ハ、わるさゝゆゑ、恵る

恐しきの時ハ、いかゝ、いみしくなどゝ、ものゝ、ゆゑ、他の
詞ども、いふを、もあの、恵るかゆゑ、むなどゝ、
つゝくわさまゝ、べしいとゝ、いくゝ、ゝハ、因ゝきを、
はゝひ、ゆうハ、かく、見ゆるあとあり、ものゝ、べく、因ゝこゝる
詞も、つゝひ、ざゝハ、かゝ、ゆうけ、ものゝ、あるゆを、思ひ
けゝゝして、物ハ、かゝ、べきゆゑ、

○奇ニ一ゝ、ゝさふゝゝゝとゝゝゆゑ

歌の数を、ゝゝゝゝるの人ハ、一ゝゝ、三ゝゝ、ゝるど
いふハ、例も、ものゝ、わるもゝゝゝゝゝゝゝ、ものゝ、

一うたに二ようあるべき、古今集序よ、おほ
ふくうたにあるべしとにても知べし、古彼日記
みもひとつこゝろあるべからず、今ひとつはべるべ
りよて要といふ事はなりて、言かさるべりわづら
ひ、さ要文ばかりに一つふたつもいへば、然るを、一
くさ二くさとしもいふひがごとなり、古今序
は細注に、哥はよろづのことのわざしげきに、
よりて、ものにふれてなりいでたるなり、
かはづの鳴こゑを聞たびにてしかりつゝ和かん、
いかでかうたを猛くもあらまほしき首のことは

○歌と文との差別

おほよそ、同じ雅言の中にも、詩の詞と、文の詞と、
差別なるべきあり、今は人は差別をくして、詩
の詞をもて文をつくるべきを、文をつくるにも
多くは、詩をもちゐ、歌をもちゐるとのみ、詩の詞を、
文にもちゐたるべきなり、車をば、ぐるまといふ、
歌詞なり、文には、はたくるまといふべし、小袖をば、
とのゐ、詩の詞なり、文には、はたけてといふべし、
ものぐさ、ものぐさといふは、詩詞なり、文にはふさと

いづれか中古の作ならんなれども、但し文章
くさぐさ古ふりあるとて、序など書ふりたるもの、
格調を整さまして、長くて歌ばかりを、詞を花
やかにまつりなすもあり、又は文のふるまひなるも
又まことに八さくれ文の中にて、事ふりて、一言
二言、言の句を、さしてまことにまぎらはしたるもあり、
あるいは、ものがたりの事どもをつゞけたやうなる
長しかづらし、今はただ大ぢうを綴りおくなり、

○思ひぐまなるよしの詞

おりしく夜の
思ひぐまなる人やあるらん
なき物をとゝの大の
わけをあらん

おれハ、俗にいとひやとうのことなり、この詞物語に
ばかり、愛ふ八、後撰集巻三、
いつかたにさかれやすらんてるはなの
乃ちりのゝく、上句、縁つきそよるもの詞のさしかたをもひ
おもひやるまくつまもりのゝくもり、結ぶを、近世、
思ひ事まくに、心ばせとあることもハ、ばつる、千
載集、後頼朝臣、
思ひぐまなるなくてもまさしめる物いひうるもおれ
よの自、おれハ、ものがたりをいひて、おもひ出つるこゝ
ろもなきよしにて、近き世よりむとそこちうし、

さるなど、又ものさびたるこゝろをもて、月はうとく
しるこゝろをもて、思ひやりをかるべきなどゝ、
みな写のこゝろ也、

○おもしろぐぜといふの詞

風はうこゝろはうつくしまる風なり、松をて、さ
して行方へ吹風をいふてゝ、ぜゝ、ぜゝを、
梅の香ぐよはぐ梅は花のこゝろ吹来る風を
う先はは風とゝもるぐはいぐ、

○落葉してといふの詞

近世、はぐ近人の作ぐ落葉してとよもるなり、
ひぐらしのこゝろ、ひぐらしてといふと、落葉してとゝ
例なり、

○おの〳〵葉といふの詞

近てさるの人、文の中よりづゝけ名をおのれ
葉、おの〳〵葉といふ事わるしまはおのれ也、
又ものを名をおのれ、行まるもあをひとつまるべきを、

梅の花といふもの、又名をいつ、ものゝ例なきものゝ、
うへ、蓮文、不後葉、とかゝるべきを、梅のひてい
ぢ、ものゝ、とかゝるべし、

○梅ぞ、きみ、ものゝ

大和ことゝ、先、人皇中、天皇、中、なりて、親王
ゝ、ものゝ、ものゝ、ものゝ、ものゝ、ものゝ、ものゝ、
ざる人、ものゝ、ものゝ、ものゝ、ものゝ、ものゝ、
ども、ものゝ、ものゝ、ものゝ、ものゝ、ものゝ、
今世人の文、ものゝ、ものゝ、ものゝ、ものゝ、

梅天

大和物語、ものゝ、
ものゝ、ものゝ、
ものゝ、ものゝ、
ものゝ

千載の後生をうべき
善の行なり人倫と
いはりつべくして
世間の事業をかまへ
物をぶ物をの人も
ゑまんべし

まづ、ふたりくてとうの和ぐひみづりまり、又仏ふき
いるといつべきを、のべてあとさ、吹いるとうの
是も、物ものく自他のたぐひあり、

○神ようひ光やうく蓋まだりよりまる

神祇の号に、誓ようと、又光やうぐ、蓋りまだりる
ぐよりもてくは、やくふるくようみて、者はまるれば、
まべて、神と称ようといつてよきことよりは、仏の名
ようく、仏を本地とし、神を垂迹ようとも、
ひとうよりは、仏の心ようめたるひがごとと

うるを、何のわきまへもなく、神をぐてよりもまるて
なりたるより、又光やうぐ、蓋りまだりるまどいの
はるも、をと、光をりのかりて文て、和光同塵、
いんようりまるひがごとして、神のはりへ人よりさること
ようまるをまはれも、仏道のこうまかる
へる張まるあるべし、例の神を仏ようて、僧はよみ
うあるまるまるべしまれひがごとやはと魂
かりんひとへんをべし、

○かりよりの同 婦ようと、こうと、
きどのかりより、

かつは、許よりつるのるるは、渡も知てあれども、なほ
そなたなりしかり、ひとくとゝつまるなきつるにて、許
まりとゝのこゝとゝつゝひとりとりつまるこゝは、
ひるる例第一、ざれば、其ゆゝてまるかまいの泊
こゝ出こゝ、こゝいひて、第業こゝ、こゝあん
とゝるも人はこゝ許へ来んまりこゝ許よりゆく
生わるゆくこゝいひて、妹かこゝゆこゝ、妹ゞ許
へゆこゝり、妹ゞ許より来こゝ、妹かこゝいが
ゆゝ、生こゝ、今は人、某ゞ許よりこゝゆくゆゝ
ゆこゝ、系こゝこゝ、ゆこゝ、ゆこゝにかくゆこゝ、

かり
妹ゞ許より来こゝ、
許はのけ給こゝ
ゆゝ、こゝ、
口説こゝ、
いくこゝ、
行はこゝ、
人のかゝつゝ
けり

○川を渡るといふ詞

山を越ゆるこゝ、川を渡るといふ、こゝ、こゝ、
今は人、接詞の目記ゞ、某川をこゝてゞ出ハ
いこゝこゝ、ゞ今は人、かゝわるゞ、
こゝこゝいこゝ、こゝ、こゝ、こゝ、こゝ、こゝ、
こゝ、こゝ、こゝ、こゝ、こゝ、こゝ、こゝ、
こゝ、こゝ、こゝ、こゝ、こゝ、こゝ、こゝ、
自他のけぢめなり、こゝ、こゝ、こゝ、
こゝ、こゝ、こゝ、こゝ、こゝ、こゝ、

○賀ゝの字

今世人、賀ゝの字を、ゝ出して、素世七十を賀して、ゝ字を、ゝかゝ、賀してゝいふ、又、漢文より、同じく字音なれども、七十を賀するといふ、雅言には、賀の字を、ゝ、賀ゝの字を、ゝ、賀ゝの字を、ゝ、賀ゝの

かゝ、さて、まてやとけるゝどもいべきやとゝみ
だるゝかいつけてやとけるゝどかゝるべゝ、黄蘗ハ
きてゝうるはくゝ、ゆかし、

○がとうつの泡

古今集恋三 詞書ハ、門ちうしもとゝぐ、
垣のゝづまとうゝ毎ひけるを、後かさりひけハ、ち
ゝ恋ゝ、おいゝハ、ゝで、ゝ、ひ波ゝけるを、青の
十日ばかりに、ち、又、葉をはなれ、紀有常が
むすめゝとゝはもるゝありて、ち、ゝ、ち

きてゝ、けるものたゝひのをもゝ、今はゝの毎ゝ
ちゝ、ゝ、皆がゝ。
ちゝもゝ、むゝはゝもみゝたゝゝも、ゝのゝ紀文ハ
皆をゝの人、、、時のひゝかゝ、ゝ、ゝ、
ゝ。ちゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、皆がゝ
いゝハ、雅ゝ、俗ゝ近ゝ、ゝ、詞ゝ、
ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、
ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、
ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、
ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、

其けぢめ、古はよも文とも、はよくさて、ゆゞしうひ
ぬべし、

○かゝりとゝの詞

かゝりハ、此るゝ、れゝ、彼るゝ、もゝ、うるひハ、ば
るれ、かるゝ、彼るゝ、もゝ、ぢゝ、ぢれ、ぢゝ、ぢれ、
詞より、然るを、近きほの、ハ、ば、詞をば、ふまず
きてきてつゝまるゝ、ふもと、濁文の具の字
とかるゝ、ひがゝ、松、濁文ある具の字ハうつと
別べきこと、南こと別べきとうけうへとも、ぢたぬ、

有こゝ、ゝ、ゝ、別ゝ、右のゝ、ゝ、別ゝ、ゝ、近
ゝ、ゝ、ゝ、別ゝ、ゝ、ゝ、

爰の七絵巻を、なるき、うき、のとけき、つゆけき、
宴けき、はるなるき、又嬉しき、かすみ、雪き
さびしき、くやしきなど詠む、此き しき はよく、
㋐ ㋑ ㋒ ㋓ ㋔ ㋕ ㋖ ㋗ ㋘ ㋙ ㋚ ㋛ ㋜ ㋝ ㋞ ㋟ ㋠ ㋡ ㋢ ㋣ ㋤ ㋥ ㋦ ㋧ ㋨ ㋩ ㋪ ㋫ ㋬ ㋭ ㋮ ㋯ ㋰ ㋱ ㋲ ㋳ ㋴ ㋵ ㋶ ㋷ ㋸ ㋹ ㋺ ㋻ ㋼ ㋽ ㋾ ㋿ ㌀ ㌁ ㌂ ㌃ ㌄ ㌅ ㌆ ㌇ ㌈ ㌉ ㌊ ㌋ ㌌ ㌍ ㌎ ㌏ ㌐ ㌑ ㌒ ㌓ ㌔ ㌕ ㌖ ㌗ ㌘ ㌙ ㌚ ㌛ ㌜ ㌝ ㌞ ㌟ ㌠ ㌡ ㌢ ㌣ ㌤ ㌥ ㌦ ㌧ ㌨ ㌩ ㌪ ㌫ ㌬ ㌭ ㌮ ㌯ ㌰ ㌱ ㌲ ㌳ ㌴ ㌵ ㌶ ㌷ ㌸ ㌹ ㌺ ㌻ ㌼ ㌽ ㌾ ㌿ ㍀ ㍁ ㍂ ㍃ ㍄ ㍅ ㍆ ㍇ ㍈ ㍉ ㍊ ㍋ ㍌ ㍍ ㍎ ㍏ ㍐ ㍑ ㍒ ㍓ ㍔ ㍕ ㍖ ㍗ ㍘ ㍙ ㍚ ㍛ ㍜ ㍝ ㍞ ㍟ ㍠ ㍡ ㍢ ㍣ ㍤ ㍥ ㍦ ㍧ ㍨ ㍩ ㍪ ㍫ ㍬ ㍭ ㍮ ㍯ ㍰ ㍱ ㍲ ㍳ ㍴ ㍵ ㍶ ㍷ ㍸ ㍹ ㍺ ㍻ ㍼ ㍽ ㍾ ㍿ ㎀ ㎁ ㎂ ㎃ ㎄ ㎅ ㎆ ㎇ ㎈ ㎉ ㎊ ㎋ ㎌ ㎍ ㎎ ㎏ ㎐ ㎑ ㎒ ㎓ ㎔ ㎕ ㎖ ㎗ ㎘ ㎙ ㎚ ㎛ ㎜ ㎝ ㎞ ㎟ ㎠ ㎡ ㎢ ㎣ ㎤ ㎥ ㎦ ㎧ ㎨ ㎩ ㎪ ㎫ ㎬ ㎭ ㎮ ㎯ ㎰ ㎱ ㎲ ㎳ ㎴ ㎵ ㎶ ㎷ ㎸ ㎹ ㎺ ㎻ ㎼ ㎽ ㎾ ㎿ ㏀ ㏁ ㏂ ㏃ ㏄ ㏅ ㏆ ㏇ ㏈ ㏉ ㏊ ㏋ ㏌ ㏍ ㏎ ㏏ ㏐ ㏑ ㏒ ㏓ ㏔ ㏕ ㏖ ㏗ ㏘ ㏙ ㏚ ㏛ ㏜ ㏝ ㏞ ㏟ ㏠ ㏡ ㏢ ㏣ ㏤ ㏥ ㏦ ㏧ ㏨ ㏩ ㏪ ㏫ ㏬ ㏭ ㏮ ㏯ ㏰ ㏱ ㏲ ㏳ ㏴ ㏵ ㏶ ㏷ ㏸ ㏹ ㏺ ㏻ ㏼ ㏽ ㏾ ㏿ 㐀 㐁 㐂 㐃 㐄 㐅 㐆 㐇 㐈 㐉 㐊 㐋 㐌 㐍 㐎 㐏 㐐 㐑 㐒 㐓 㐔 㐕 㐖 㐗 㐘 㐙 㐚 㐛 㐜 㐝 㐞 㐟 㐠 㐡 㐢 㐣 㐤 㐥 㐦 㐧 㐨 㐩 㐪 㐫 㐬 㐭 㐮 㐯 㐰 㐱 㐲 㐳 㐴 㐵 㐶 㐷 㐸 㐹 㐺 㐻 㐼 㐽 㐾 㐿 㑀 㑁 㑂 㑃 㑄 㑅 㑆 㑇 㑈 㑉 㑊 㑋 㑌 㑍 㑎 㑏 㑐 㑑 㑒 㑓 㑔 㑕 㑖 㑗 㑘 㑙 㑚 㑛 㑜 㑝 㑞 㑟 㑠 㑡 㑢 㑣 㑤 㑥 㑦 㑧 㑨 㑩 㑪 㑫 㑬 㑭 㑮 㑯 㑰 㑱 㑲 㑳 㑴 㑵 㑶 㑷 㑸 㑹 㑺 㑻 㑼 㑽 㑾 㑿 㒀 㒁 㒂 㒃 㒄 㒅 㒆 㒇 㒈 㒉 㒊 㒋 㒌 㒍 㒎 㒏 㒐 㒑 㒒 㒓 㒔 㒕 㒖 㒗 㒘 㒙 㒚 㒛 㒜 㒝 㒞 㒟 㒠 㒡 㒢 㒣 㒤 㒥 㒦 㒧 㒨 㒩 㒪 㒫 㒬 㒭 㒮 㒯 㒰 㒱 㒲 㒳 㒴 㒵 㒶 㒷 㒸 㒹 㒺 㒻 㒼 㒽 㒾 㒿 㓀 㓁 㓂 㓃 㓄 㓅 㓆 㓇 㓈 㓉 㓊 㓋 㓌 㓍 㓎 㓏 㓐 㓑 㓒 㓓 㓔 㓕 㓖 㓗 㓘 㓙 㓚 㓛 㓜 㓝 㓞 㓟 㓠 㓡 㓢 㓣 㓤 㓥 㓦 㓧 㓨 㓩 㓪 㓫 㓬 㓭 㓮 㓯 㓰 㓱 㓲 㓳 㓴 㓵 㓶 㓷 㓸 㓹 㓺 㓻 㓼 㓽 㓾 㓿 㔀 㔁 㔂 㔃 㔄 㔅 㔆 㔇 㔈 㔉 㔊 㔋 㔌 㔍 㔎 㔏 㔐 㔑 㔒 㔓 㔔 㔕 㔖 㔗 㔘 㔙 㔚 㔛 㔜 㔝 㔞 㔟 㔠 㔡 㔢 㔣 㔤 㔥 㔦 㔧 㔨 㔩 㔪 㔫 㔬 㔭 㔮 㔯 㔰 㔱 㔲 㔳 㔴 㔵 㔶 㔷 㔸 㔹 㔺 㔻 㔼 㔽 㔾 㔿 㕀 㕁 㕂 㕃 㕄 㕅 㕆 㕇 㕈 㕉 㕊 㕋 㕌 㕍 㕎 㕏 㕐 㕑 㕒 㕓 㕔 㕕 㕖 㕗 㕘 㕙 㕚 㕛 㕜 㕝 㕞 㕟 㕠 㕡 㕢 㕣 㕤 㕥 㕦 㕧 㕨 㕩 㕪 㕫 㕬 㕭 㕮 㕯 㕰 㕱 㕲 㕳 㕴 㕵 㕶 㕷 㕸 㕹 㕺 㕻 㕼 㕽 㕾 㕿 㖀 㖁 㖂 㖃 㖄 㖅 㖆 㖇 㖈 㖉 㖊 㖋 㖌 㖍 㖎 㖏 㖐 㖑 㖒 㖓 㖔 㖕 㖖 㖗 㖘 㖙 㖚 㖛 㖜 㖝 㖞 㖟 㖠 㖡 㖢 㖣 㖤 㖥 㖦 㖧 㖨 㖩 㖪 㖫 㖬 㖭 㖮 㖯 㖰 㖱 㖲 㖳 㖴 㖵 㖶 㖷 㖸 㖹 㖺 㖻 㖼 㖽 㖾 㖿 㗀 㗁 㗂 㗃 㗄 㗅 㗆 㗇 㗈 㗉 㗊 㗋 㗌 㗍 㗎 㗏 㗐 㗑 㗒 㗓 㗔 㗕 㗖 㗗 㗘 㗙 㗚 㗛 㗜 㗝 㗞 㗟 㗠 㗡 㗢 㗣 㗤 㗥 㗦 㗧 㗨 㗩 㗪 㗫 㗬 㗭 㗮 㗯 㗰 㗱 㗲 㗳 㗴 㗵 㗶 㗷 㗸 㗹 㗺 㗻 㗼 㗽 㗾 㗿 㘀 㘁 㘂 㘃 㘄 㘅 㘆 㘇 㘈 㘉 㘊 㘋 㘌 㘍 㘎 㘏 㘐 㘑 㘒 㘓 㘔 㘕 㘖 㘗 㘘 㘙 㘚 㘛 㘜 㘝 㘞 㘟 㘠 㘡 㘢 㘣 㘤 㘥 㘦 㘧 㘨 㘩 㘪 㘫 㘬 㘭 㘮 㘯 㘰 㘱 㘲 㘳 㘴 㘵 㘶 㘷 㘸 㘹 㘺 㘻 㘼 㘽 㘾 㘿 㙀 㙁 㙂 㙃 㙄 㙅 㙆 㙇 㙈 㙉 㙊 㙋 㙌 㙍 㙎 㙏 㙐 㙑 㙒 㙓 㙔 㙕 㙖 㙗 㙘 㙙 㙚 㙛 㙜 㙝 㙞 㙟 㙠 㙡 㙢 㙣 㙤 㙥 㙦 㙧 㙨 㙩 㙪 㙫 㙬 㙭 㙮 㙯 㙰 㙱 㙲 㙳 㙴 㙵 㙶 㙷 㙸 㙹 㙺 㙻 㙼 㙽 㙾 㙿 㚀 㚁 㚂 㚃 㚄 㚅 㚆 㚇 㚈 㚉 㚊 㚋 㚌 㚍 㚎 㚏 㚐 㚑 㚒 㚓 㚔 㚕 㚖 㚗 㚘 㚙 㚚 㚛 㚜 㚝 㚞 㚟 㚠 㚡 㚢 㚣 㚤 㚥 㚦 㚧 㚨 㚩 㚪 㚫 㚬 㚭 㚮 㚯 㚰 㚱 㚲 㚳 㚴 㚵 㚶 㚷 㚸 㚹 㚺 㚻 㚼 㚽 㚾 㚿 㛀 㛁 㛂 㛃 㛄 㛅 㛆 㛇 㛈 㛉 㛊 㛋 㛌 㛍 㛎 㛏 㛐 㛑 㛒 㛓 㛔 㛕 㛖 㛗 㛘 㛙 㛚 㛛 㛜 㛝 㛞 㛟 㛠 㛡 㛢 㛣 㛤 㛥 㛦 㛧 㛨 㛩 㛪 㛫 㛬 㛭 㛮 㛯 㛰 㛱 㛲 㛳 㛴 㛵 㛶 㛷 㛸 㛹 㛺 㛻 㛼 㛽 㛾 㛿 㜀 㜁 㜂 㜃 㜄 㜅 㜆 㜇 㜈 㜉 㜊 㜋 㜌 㜍 㜎 㜏 㜐 㜑 㜒 㜓 㜔 㜕 㜖 㜗 㜘 㜙 㜚 㜛 㜜 㜝 㜞 㜟 㜠 㜡 㜢 㜣 㜤 㜥 㜦 㜧 㜨 㜩 㜪 㜫 㜬 㜭 㜮 㜯 㜰 㜱 㜲 㜳 㜴 㜵 㜶 㜷 㜸 㜹 㜺 㜻 㜼 㜽 㜾 㜿 㝀 㝁 㝂 㝃 㝄 㝅 㝆 㝇 㝈 㝉 㝊 㝋 㝌 㝍 㝎 㝏 㝐 㝑 㝒 㝓 㝔 㝕 㝖 㝗 㝘 㝙 㝚 㝛 㝜 㝝 㝞 㝟 㝠 㝡 㝢 㝣 㝤 㝥 㝦 㝧 㝨 㝩 㝪 㝫 㝬 㝭 㝮 㝯 㝰 㝱 㝲 㝳 㝴 㝵 㝶 㝷 㝸 㝹 㝺 㝻 㝼 㝽 㝾 㝿 㞀 㞁 㞂 㞃 㞄 㞅 㞆 㞇 㞈 㞉 㞊 㞋 㞌 㞍 㞎 㞏 㞐 㞑 㞒 㞓 㞔 㞕 㞖 㞗 㞘 㞙 㞚 㞛 㞜 㞝 㞞 㞟 㞠 㞡 㞢 㞣 㞤 㞥 㞦 㞧 㞨 㞩 㞪 㞫 㞬 㞭 㞮 㞯 㞰 㞱 㞲 㞳 㞴 㞵 㞶 㞷 㞸 㞹 㞺 㞻 㞼 㞽 㞾 㞿 㟀 㟁 㟂 㟃 㟄 㟅 㟆 㟇 㟈 㟉 㟊 㟋 㟌 㟍 㟎 㟏 㟐 㟑 㟒 㟓 㟔 㟕 㟖 㟗 㟘 㟙 㟚 㟛 㟜 㟝 㟞 㟟 㟠 㟡 㟢 㟣 㟤 㟥 㟦 㟧 㟨 㟩 㟪 㟫 㟬 㟭 㟮 㟯 㟰 㟱 㟲 㟳 㟴 㟵 㟶 㟷 㟸 㟹 㟺 㟻 㟼 㟽 㟾 㟿 㠀 㠁 㠂 㠃 㠄 㠅 㠆 㠇 㠈 㠉 㠊 㠋 㠌 㠍 㠎 㠏 㠐 㠑 㠒 㠓 㠔 㠕 㠖 㠗 㠘 㠙 㠚 㠛 㠜 㠝 㠞 㠟 㠠 㠡 㠢 㠣 㠤 㠥 㠦 㠧 㠨 㠩 㠪 㠫 㠬 㠭 㠮 㠯 㠰 㠱 㠲 㠳 㠴 㠵 㠶 㠷 㠸 㠹 㠺 㠻 㠼 㠽 㠾 㠿 㡀 㡁 㡂 㡃 㡄 㡅 㡆 㡇 㡈 㡉 㡊 㡋 㡌 㡍 㡎 㡏 㡐 㡑 㡒 㡓 㡔 㡕 㡖 㡗 㡘 㡙 㡚 㡛 㡜 㡝 㡞 㡟 㡠 㡡 㡢 㡣 㡤 㡥 㡦 㡧 㡨 㡩 㡪 㡫 㡬 㡭 㡮 㡯 㡰 㡱 㡲 㡳 㡴 㡵 㡶 㡷 㡸 㡹 㡺 㡻 㡼 㡽 㡾 㡿 㢀 㢁 㢂 㢃 㢄 㢅 㢆 㢇 㢈 㢉 㢊 㢋 㢌 㢍 㢎 㢏 㢐 㢑 㢒 㢓 㢔 㢕 㢖 㢗 㢘 㢙 㢚 㢛 㢜 㢝 㢞 㢟 㢠 㢡 㢢 㢣 㢤 㢥 㢦 㢧 㢨 㢩 㢪 㢫 㢬 㢭 㢮 㢯 㢰 㢱 㢲 㢳 㢴 㢵 㢶 㢷 㢸 㢹 㢺 㢻 㢼 㢽 㢾 㢿 㣀 㣁 㣂 㣃 㣄 㣅 㣆 㣇 㣈 㣉 㣊 㣋 㣌 㣍 㣎 㣏 㣐 㣑 㣒 㣓 㣔 㣕 㣖 㣗 㣘 㣙 㣚 㣛 㣜 㣝 㣞 㣟 㣠 㣡 㣢 㣣 㣤 㣥 㣦 㣧 㣨 㣩 㣪 㣫 㣬 㣭 㣮 㣯 㣰 㣱 㣲 㣳 㣴 㣵 㣶 㣷 㣸 㣹 㣺 㣻 㣼 㣽 㣾 㣿 㤀 㤁 㤂 㤃 㤄 㤅 㤆 㤇 㤈 㤉 㤊 㤋 㤌 㤍 㤎 㤏 㤐 㤑 㤒 㤓 㤔 㤕 㤖 㤗 㤘 㤙 㤚 㤛 㤜 㤝 㤞 㤟 㤠 㤡 㤢 㤣 㤤 㤥 㤦 㤧 㤨 㤩 㤪 㤫 㤬 㤭 㤮 㤯 㤰 㤱 㤲 㤳 㤴 㤵 㤶 㤷 㤸 㤹 㤺 㤻 㤼 㤽 㤾 㤿 㥀 㥁 㥂 㥃 㥄 㥅 㥆 㥇 㥈 㥉 㥊 㥋 㥌 㥍 㥎 㥏 㥐 㥑 㥒 㥓 㥔 㥕 㥖 㥗 㥘 㥙 㥚 㥛 㥜 㥝 㥞 㥟 㥠 㥡 㥢 㥣 㥤 㥥 㥦 㥧 㥨 㥩 㥪 㥫 㥬 㥭 㥮 㥯 㥰 㥱 㥲 㥳 㥴 㥵 㥶 㥷 㥸 㥹 㥺 㥻 㥼 㥽 㥾 㥿 㦀 㦁 㦂 㦃 㦄 㦅 㦆 㦇 㦈 㦉 㦊 㦋 㦌 㦍 㦎 㦏 㦐 㦑 㦒 㦓 㦔 㦕 㦖 㦗 㦘 㦙 㦚 㦛 㦜 㦝 㦞 㦟 㦠 㦡 㦢 㦣 㦤 㦥 㦦 㦧 㦨 㦩 㦪 㦫 㦬 㦭 㦮 㦯 㦰 㦱 㦲 㦳 㦴 㦵 㦶 㦷 㦸 㦹 㦺 㦻 㦼 㦽 㦾 㦿 㧀 㧁 㧂 㧃 㧄 㧅 㧆 㧇 㧈 㧉 㧊 㧋 㧌 㧍 㧎 㧏 㧐 㧑 㧒 㧓 㧔 㧕 㧖 㧗 㧘 㧙 㧚 㧛 㧜 㧝 㧞 㧟 㧠 㧡 㧢 㧣 㧤 㧥 㧦 㧧 㧨 㧩 㧪 㧫 㧬 㧭 㧮 㧯 㧰 㧱 㧲 㧳 㧴 㧵 㧶 㧷 㧸 㧹 㧺 㧻 㧼 㧽 㧾 㧿 㨀 㨁 㨂 㨃 㨄 㨅 㨆 㨇 㨈 㨉 㨊 㨋 㨌 㨍 㨎 㨏 㨐 㨑 㨒 㨓 㨔 㨕 㨖 㨗 㨘 㨙 㨚 㨛 㨜 㨝 㨞 㨟 㨠 㨡 㨢 㨣 㨤 㨥 㨦 㨧 㨨 㨩 㨪 㨫 㨬 㨭 㨮 㨯 㨰 㨱 㨲 㨳 㨴 㨵 㨶 㨷 㨸 㨹 㨺 㨻 㨼 㨽 㨾 㨿 㩀 㩁 㩂 㩃 㩄 㩅 㩆 㩇 㩈 㩉 㩊 㩋 㩌 㩍 㩎 㩏 㩐 㩑 㩒 㩓 㩔 㩕 㩖 㩗 㩘 㩙 㩚 㩛 㩜 㩝 㩞 㩟 㩠 㩡 㩢 㩣 㩤 㩥 㩦 㩧 㩨 㩩 㩪 㩫 㩬 㩭 㩮 㩯 㩰 㩱 㩲 㩳 㩴 㩵 㩶 㩷 㩸 㩹 㩺 㩻 㩼 㩽 㩾 㩿 㪀 㪁 㪂 㪃 㪄 㪅 㪆 㪇 㪈 㪉 㪊 㪋 㪌 㪍 㪎 㪏 㪐 㪑 㪒 㪓 㪔 㪕 㪖 㪗 㪘 㪙 㪚 㪛 㪜 㪝 㪞 㪟 㪠 㪡 㪢 㪣 㪤 㪥 㪦 㪧 㪨 㪩 㪪 㪫 㪬 㪭 㪮 㪯 㪰 㪱 㪲 㪳 㪴 㪵 㪶 㪷 㪸 㪹 㪺 㪻 㪼 㪽 㪾 㪿 㫀 㫁 㫂 㫃 㫄 㫅 㫆 㫇 㫈 㫉 㫊 㫋 㫌 㫍 㫎 㫏 㫐 㫑 㫒 㫓 㫔 㫕 㫖 㫗 㫘 㫙 㫚 㫛 㫜 㫝 㫞 㫟 㫠 㫡 㫢 㫣 㫤 㫥 㫦 㫧 㫨 㫩 㫪 㫫 㫬 㫭 㫮 㫯 㫰 㫱 㫲 㫳 㫴 㫵 㫶 㫷 㫸 㫹 㫺 㫻 㫼 㫽 㫾 㫿 㬀 㬁 㬂 㬃 㬄 㬅 㬆 㬇 㬈 㬉 㬊 㬋 㬌 㬍 㬎 㬏 㬐 㬑 㬒 㬓 㬔 㬕 㬖 㬗 㬘 㬙 㬚 㬛 㬜 㬝 㬞 㬟 㬠 㬡 㬢 㬣 㬤 㬥 㬦 㬧 㬨 㬩 㬪 㬫 㬬 㬭 㬮 㬯 㬰 㬱 㬲 㬳 㬴 㬵 㬶 㬷 㬸 㬹 㬺 㬻 㬼 㬽 㬾 㬿 㭀 㭁 㭂 㭃 㭄 㭅 㭆 㭇 㭈 㭉 㭊 㭋 㭌 㭍 㭎 㭏 㭐 㭑 㭒 㭓 㭔 㭕 㭖 㭗 㭘 㭙 㭚 㭛 㭜 㭝 㭞 㭟 㭠 㭡 㭢 㭣 㭤 㭥 㭦 㭧 㭨 㭩 㭪 㭫 㭬 㭭 㭮 㭯 㭰 㭱 㭲 㭳 㭴 㭵 㭶 㭷 㭸 㭹 㭺 㭻 㭼 㭽 㭾 㭿 㮀 㮁 㮂 㮃 㮄 㮅 㮆 㮇 㮈 㮉 㮊 㮋 㮌 㮍 㮎 㮏 㮐 㮑 㮒 㮓 㮔 㮕 㮖 㮗 㮘 㮙 㮚 㮛 㮜 㮝 㮞 㮟 㮠 㮡 㮢 㮣 㮤 㮥 㮦 㮧 㮨 㮩 㮪 㮫 㮬 㮭 㮮 㮯 㮰 㮱 㮲 㮳 㮴 㮵 㮶 㮷 㮸 㮹 㮺 㮻 㮼 㮽 㮾 㮿 㯀 㯁 㯂 㯃 㯄 㯅 㯆 㯇 㯈 㯉 㯊 㯋 㯌 㯍 㯎 㯏 㯐 㯑 㯒 㯓 㯔 㯕 㯖 㯗 㯘 㯙 㯚 㯛 㯜 㯝 㯞 㯟 㯠 㯡 㯢 㯣 㯤 㯥 㯦 㯧 㯨 㯩 㯪 㯫 㯬 㯭 㯮 㯯 㯰 㯱 㯲 㯳 㯴 㯵 㯶 㯷 㯸 㯹 㯺 㯻 㯼 㯽 㯾 㯿 㰀 㰁 㰂 㰃 㰄 㰅 㰆 㰇 㰈 㰉 㰊 㰋 㰌 㰍 㰎 㰏 㰐 㰑 㰒 㰓 㰔 㰕 㰖 㰗 㰘 㰙 㰚 㰛 㰜 㰝 㰞 㰟 㰠 㰡 㰢 㰣 㰤 㰥 㰦 㰧 㰨 㰩 㰪 㰫 㰬 㰭 㰮 㰯 㰰 㰱 㰲 㰳 㰴 㰵 㰶 㰷 㰸 㰹 㰺 㰻 㰼 㰽 㰾 㰿 㱀 㱁 㱂 㱃 㱄 㱅 㱆 㱇 㱈 㱉 㱊 㱋 㱌 㱍 㱎 㱏 㱐 㱑 㱒 㱓 㱔 㱕 㱖 㱗 㱘 㱙 㱚 㱛 㱜 㱝 㱞 㱟 㱠 㱡 㱢 㱣 㱤 㱥 㱦 㱧 㱨 㱩 㱪 㱫 㱬 㱭 㱮 㱯 㱰 㱱 㱲 㱳 㱴 㱵 㱶 㱷 㱸 㱹 㱺 㱻 㱼 㱽 㱾 㱿 㲀 㲁 㲂 㲃 㲄 㲅 㲆 㲇 㲈 㲉 㲊 㲋 㲌 㲍 㲎 㲏 㲐 㲑 㲒 㲓 㲔 㲕 㲖 㲗 㲘 㲙 㲚 㲛 㲜 㲝 㲞 㲟 㲠 㲡 㲢 㲣 㲤 㲥 㲦 㲧 㲨 㲩 㲪 㲫 㲬 㲭 㲮 㲯 㲰 㲱 㲲 㲳 㲴 㲵 㲶 㲷 㲸 㲹 㲺 㲻 㲼 㲽 㲾 㲿 㳀 㳁 㳂 㳃 㳄 㳅 㳆 㳇 㳈 㳉 㳊 㳋 㳌 㳍 㳎 㳏 㳐 㳑 㳒 㳓 㳔 㳕 㳖 㳗 㳘 㳙 㳚 㳛 㳜 㳝 㳞 㳟 㳠 㳡 㳢 㳣 㳤 㳥 㳦 㳧 㳨 㳩 㳪 㳫 㳬 㳭 㳮 㳯 㳰 㳱 㳲 㳳 㳴 㳵 㳶 㳷 㳸 㳹 㳺 㳻 㳼 㳽 㳾 㳿 㴀 㴁 㴂 㴃 㴄 㴅 㴆 㴇 㴈 㴉 㴊 㴋 㴌 㴍 㴎 㴏 㴐 㴑 㴒 㴓 㴔 㴕 㴖 㴗 㴘 㴙 㴚 㴛 㴜 㴝 㴞 㴟 㴠 㴡 㴢 㴣 㴤 㴥 㴦 㴧 㴨 㴩 㴪 㴫 㴬 㴭 㴮 㴯 㴰 㴱 㴲 㴳 㴴 㴵 㴶 㴷 㴸 㴹 㴺 㴻 㴼 㴽 㴾 㴿 㵀 㵁 㵂 㵃 㵄 㵅 㵆 㵇 㵈 㵉 㵊 㵋 㵌 㵍 㵎 㵏 㵐 㵑 㵒 㵓 㵔 㵕 㵖 㵗 㵘 㵙 㵚 㵛 㵜 㵝 㵞 㵟 㵠 㵡 㵢 㵣 㵤 㵥 㵦 㵧 㵨 㵩 㵪 㵫 㵬 㵭 㵮 㵯 㵰 㵱 㵲 㵳 㵴 㵵 㵶 㵷 㵸 㵹 㵺 㵻 㵼 㵽 㵾 㵿 㶀 㶁 㶂 㶃 㶄 㶅 㶆 㶇 㶈 㶉 㶊 㶋 㶌 㶍 㶎 㶏 㶐 㶑 㶒 㶓 㶔 㶕 㶖 㶗 㶘 㶙 㶚 㶛 㶜 㶝 㶞 㶟 㶠 㶡 㶢 㶣 㶤 㶥 㶦 㶧 㶨 㶩 㶪 㶫 㶬 㶭 㶮 㶯 㶰 㶱 㶲 㶳 㶴 㶵 㶶 㶷 㶸 㶹 㶺 㶻 㶼 㶽 㶾 㶿 㷀 㷁 㷂 㷃 㷄 㷅 㷆 㷇 㷈 㷉 㷊 㷋 㷌 㷍 㷎 㷏 㷐 㷑 㷒 㷓 㷔 㷕 㷖 㷗 㷘 㷙 㷚 㷛 㷜 㷝 㷞 㷟 㷠 㷡 㷢 㷣 㷤 㷥 㷦 㷧 㷨 㷩 㷪 㷫 㷬 㷭 㷮 㷯 㷰 㷱 㷲 㷳 㷴 㷵 㷶 㷷 㷸 㷹 㷺 㷻 㷼 㷽 㷾 㷿 㸀 㸁 㸂 㸃 㸄 㸅 㸆 㸇 㸈 㸉 㸊 㸋 㸌 㸍 㸎 㸏 㸐 㸑 㸒 㸓 㸔 㸕 㸖 㸗 㸘 㸙 㸚 㸛 㸜 㸝 㸞 㸟 㸠 㸡 㸢 㸣 㸤 㸥 㸦 㸧 㸨 㸩 㸪 㸫 㸬 㸭 㸮 㸯 㸰 㸱 㸲 㸳 㸴 㸵 㸶 㸷 㸸 㸹 㸺 㸻 㸼 㸽 㸾 㸿 㹀 㹁 㹂 㹃 㹄 㹅 㹆 㹇 㹈 㹉 㹊 㹋 㹌 㹍 㹎 㹏 㹐 㹑 㹒 㹓 㹔 㹕 㹖 㹗 㹘 㹙 㹚 㹛 㹜 㹝 㹞 㹟 㹠 㹡 㹢 㹣 㹤 㹥 㹦 㹧 㹨 㹩 㹪 㹫 㹬 㹭 㹮 㹯 㹰 㹱 㹲 㹳 㹴 㹵 㹶 㹷 㹸 㹹 㹺 㹻 㹼 㹽 㹾 㹿 㺀 㺁 㺂 㺃 㺄 㺅 㺆 㺇 㺈 㺉 㺊 㺋 㺌 㺍 㺎 㺏 㺐 㺑 㺒 㺓 㺔 㺕 㺖 㺗 㺘 㺙 㺚 㺛 㺜 㺝 㺞 㺟 㺠 㺡 㺢 㺣 㺤 㺥 㺦 㺧 㺨 㺩 㺪 㺫 㺬 㺭 㺮 㺯 㺰 㺱 㺲 㺳 㺴 㺵 㺶 㺷 㺸 㺹 㺺 㺻 㺼 㺽 㺾 㺿 㻀 㻁 㻂 㻃 㻄 㻅 㻆 㻇 㻈 㻉 㻊 㻋 㻌 㻍 㻎 㻏 㻐 㻑 㻒 㻓 㻔 㻕 㻖 㻗 㻘 㻙 㻚 㻛 㻜 㻝 㻞 㻟 㻠 㻡 㻢 㻣 㻤 㻥 㻦 㻧 㻨 㻩 㻪 㻫 㻬 㻭 㻮 㻯 㻰 㻱 㻲 㻳 㻴 㻵 㻶 㻷 㻸 㻹 㻺 㻻 㻼 㻽 㻾 㻿 㼀 㼁 㼂 㼃 㼄 㼅 㼆 㼇 㼈 㼉 㼊 㼋 㼌 㼍 㼎 㼏 㼐 㼑 㼒 㼓 㼔 㼕 㼖 㼗 㼘 㼙 㼚 㼛 㼜 㼝 㼞 㼟 㼠 㼡 㼢 㼣 㼤 㼥 㼦 㼧 㼨 㼩 㼪 㼫 㼬 㼭 㼮 㼯 㼰 㼱 㼲 㼳 㼴 㼵 㼶 㼷 㼸 㼹 㼺

さて、江戸にてもひとしく、関よりこなたを、江戸とぞ、江戸にては、関よりこなたを、上方とぞ、合せ言、かりそめ遊興などにも、彼のうたてあるかなをかりやさぐ、星や星やなどいふ、ものしり、私にも帆ひくとて、いとぐひくとはいふなり、帆をいかなるものをいふ、引足ものやうに、横ざまにひきすべりて、帆をあぐとて、引ひきぐるを、帆をあぐとて、紐をひくをいふ、又、ひきぐるを、帆の用なれうをおもひて、引かるを

のこりなくさきまでかりて、納涼のこと、ものみるとて、ひぐらしあるまで、澄文と取涼とは、涼しきをもとめて、又、海とはいづべきよりも、白きを涼とは、あとはじめてよみたりんもあづかりもなべて、近世、人、多くよりもわづかにつかうまつる、かりかりの人は一きはよたりんは、又、よりもづきてはづるをも、雪はうれて、百よりこびを耳かりかり、緑をおくるを、其いひ、澄とて、澄文のあとをもとめて、鐘なくあるなどと

よもいはなとわるし、見るや、数は　て忘れ　ごえ
おれるこの中　こ河ゆる須ゆ、持衣の奇よ巻うへし
ちつも河ゆうこ　岸よりひてゆ　けたるゆと知、
岸根とよもちと　ちなぬ須ゆ、や波まぶと
すぐれ藻、分を知くふ、ちれくわろき須ゆ　ちゆど、
近き世ゆ知て河ゆ、松も格もかるひ、松原も格
原もとちういつべきを、さいひぐら知ゆこ松も格原
もちつこ　ちれこ　又ゆうて　せんうこ　あげよ河ゆ、
ちち知かやちちは　ちれ　ちも　ち知を、ちち知るぐやと
いつ、高ちせんうこ　あげゆり　右は須ゆも必、ひぐらの

みへうこゆも、近き世ゆ知て河ゆうゆり、けたぐひ多
おはうこべし、

○ここ西ちつ須

人こ拾ゆ　を、河西ちつ　こあり、こへ　ちと家ちを
上ゆ　ひ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
河ひぐらふ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
ゆり、黄ち拾須語ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
須ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
河西ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ

ゝく、俗言に、急中生、待中生とゞかれたるもの
をつけていふなるべし、されもあるべきを敬ひる歌
なり、然るに、近きころ、人の文どもをみるに、我
方へ人をいひおこせるを、某が行ようにかく
用ゆべけれどかくいふはひがごとなり、やうに
人の家にいるを、用ゆるにはみづからをうや
まふ事なるを、

○ゝゝべぐるまねたる歌

あれば、人のゝれ屋のちかうて、夫をうたくきこと

ゝく、俗言に、きあひふくるどのるもの、物をを
近き人に物れすぐれるを、ゝゝべ、けるれ
物ゝゝべぐるまなるどやうゝゝべぐきこと用ゐる
いるこゝにぐへ、

○こ百もかもたる歌

けゝゝゝゝゝゝゝ、紙ひのゝゝゝなぐら
やゝゝ用ゐ、物、今もかもの條に、こゝ
ゝ

○ゝぐるまねたる歌

仙者一さい、物語ることなき物なれども、俗人氣の毒
とうつくしき文物代乘者ハ〳〵乘らるゝとうつくしき
事、物語をも毒人惟くるしきるゝ者ハたゞ〳〵、

○古歌

龜をこゝとうつくしく、語るをも毒の方ゝ
物ゝくるむいとうるはしゝ、うつりとなき事ハ龜
とうつくしき、をしくあるを後ゝ語つゝくあとゝうみ
へるようなるで、つひゝ、又別ゝ字をかゝてく、鈎龜と
なづゝ、鈎龜とうつくしゝなるを紀あるるをや、

○あるゝ物をうつくしゝ

あるゝ物ハ、古言にあるゝ、あるゝ、うつくしゝ物語しるる
みて、いとうるはしゝ物を、人の命のをしきを、とぶき
長しゝ、あるゝ、いくつるどうつくしゝ、遠くゝ、うつくしゝ、
人を祝ふる事も、壽とのうつくしゝ物れつる語ゝ、
壽命のをしきを、あるゝ、とのうつくしゝ、とべて、
字の例よりて、例のをしを語るゝ、式をゝ、
物ゝ、うつくしゝ、

○あらしの詞

おこせを、こゝ、おこせを、あせ〜らの八いや〜ゝ
詞多り、俗を、今れ人八かへるく、おこをおこせを、
俗ゝと知て、ちかく、はるゝ、ゆ〜あせ〜ふるど
かゝひまゝるゝ、俗文ゝ、ゆ越ひなどかゝも、ゆ
おこせゝるゝまゝて、越八借字なるを、ゝ字れ
ゝと知たるやゝ、ゝ他の詞ゝ、ゝをゝ
こゝていの例多けれど、おこをを、おをゝといへる
あゝ八、昔の正しき半ゝ八なるおゝるゝ、

さく
古 拌馬拌て素反
けの詞ゝ、ゝ
ゝ葉川ゝ
ゝ
ゝ
蓑表池ゝきゝて
此ゝ

佐志す勢ゝ曾ゝ滝

○さくゝの詞

さくゝの詞八俗言ゝ、ゝ、ゝ、ゝ
又ゝゝもゝひらゝるやうゝをゝ、ゝの像に
ゝゝゝゝを見るべし、

○ゝやすゝ詞の
ゝゝ

おもきを面とし、きはめつくす事なり、ちなき
世の常に、あるべからざる事なり。文字優劣をとかるゝと
いふ事は、おもてに、ちかく字のうつくしき、筆のはたらき
まどろかしく、ものびやかなる、古のこゝろを
考へて、ものびやかなるべし、

○まことの和

近世の人の筆を、まことの和にまで、改変をもつて
とゝのへ、とゝのへ、ハ、もろ、ものも、おもむき、ものと

いひてよろしきものを、まことの和にまでもつくりなす
世間を、ものをよく考へて、書べし、

○まことの和

まことの和ハ、俗言にて、やまと詞なり、近世
物書、くだらの傳よりいへり、

○すなはちなるまことの和

すなはちなるまことの和ハ、ものなるをいふ
物なり、近世の人、まことなる世代、ものなる、曲

なるもの多く、正しく速きことを、ねりよるやたぐへ是、

○すぐれるもの

歩くべき速きものを、とぐもものハ、俗言よあり、

あれ、雅ものも、文ものハ、ちくハきくよりぬこと多くを、

手無よ、とぐ多る時、代るゞと多くよもいるゞや、

○せうこと文の泡

今の人、消息文を、雅て書てハいとたひらを

ねりまぜるやうなるもの、俗言なり

雅文ハ、ものうけ、愛よいとくるつもりて、又物を

おくりおくるなどを、謝とる事を、かやをやとなども

俗言なり、ものをハ、俗語よ、礼をのゝ、礼よりゆくなどよ

を、おくりおくるとしてのゝるれど、やハ古言にて、俗言よ

礼のこを、おくりおくるなどのゝ、雅言ハ、謝とるるを、ものゝるる

あり、謝とるを、雅言ハ、ものゝ、俗ハ礼を

ものゝるゞを、ものゝるゞを、ものゝ、俗ハ礼を、いとまを

謝してかゝるゞ、又物をおくるゞ、たるを

えさせるを、ものゝ、ものがてゝ、なるゞ、雅言

なれ、ものゝ、雅言ハ、かゝるゞ、俗ハ

ものゝ、ものがてゝ、ものゝ、ものがてゝ、ものゝ、ものがてゝ

かくして掛詞を用ひて、古人の作、古き物語などに多きあり、みて知べしまづ、甚だしかるべ
ながらも、雅文のつゝしやうなれば、俗をまじゑるは、本のたゞひいと物しく、又いまだ其物も
なきも、今は俗文よりまさりたれば、たとひ其詞をば、
あらぬ雅言を用ひても、俗をとるべきこと多
けれども其趣もいまゝのをとゝ考へて、まづ、今は
人の文よりたゞのひがごとは、其詞きづし、

○そひとうへうのこと

詞は、雅言、俗言、ねもそもよりまどのつゝ、雅言は物の
づゝねもそもひとつ、俗言は物の名、自分と
そへ、ねきそもつゝ、ひとりでそひとつ、
そひとつ、外の物が、雅言、俗言を、全く人は、
物ひく此差別、まどそひとつ、べきそへとつ、
そもとつ、べきをゝ、はたつ物ゝとつ、たゞひ
物ひとつ、そもつ、べきを、りゝ、
たつ物ゝ、古人は、そもつ、ものゝ
○そもつのこと

うけてうたへバ、ゐなのうゆをいよ／＼の中よりとを
うけて、其時ときていの河ものくたくんぐ、
ものくの事、ひとしよりけることゝ、其ものう
くけものゝ時といつまり、ゆるゆるとゆ
まして、たゞひとく昔といつるゆ、用ゐたゞへ、

○そもゝいの河

そもゝ、日本紀に、成務天皇紀に、巻ゆ、背
面とあるおとくうゝけ事ゆ、後世ゆ、外
面と心ゐてよ、ひゞまとり、古ハ、をけいろ

のゝうゝ、そもゝいの河もいやしとゞて、外をハやく
おろいゝ、そもゝいつまゝ、外を、そもゝいつゐ、ひげと
俗言ゆ、

○それゝいの河

文はゞ、それゝと、手ゐゞゝゝ、淫文ハ、失ゆ
つゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ語ゝかゝゝ、必事ゐゞ記
おゝまり、ゆゝを、ゐゐも、ゐて、手れゝ、ゐ、淫文と
なゝくゝゐゐゝて、ゐゞゝまゝ、

○某がもとに某がて

近きころ世人、文のもとづくに、ものを某がもと、某がのもとかくばかりをしるし、世間をわく
へきものとよりびとをべてのとひらいて事はさらなる
よりて、かまのわれ事おほらて、思ひのみをつくひあく
きあるを近き人それ味をもぐるかゝかる
みだりあるをもつくるなり、

○某のもとにあるもの

もべて人の名をいひ出るに、或は国より来る云
人あるに、或はむかし来といひし老のもとと
いうべき紙、近き頃の人は文に来るを人あるに
来るものなく、こゝにあるを夫は何にもて記
置るものも、漢文は近頃の川にあり有某者
と附出るを見て、手をぬぐひて、漢文を
ふる記別を読付て有某者、と読
おれぞ正しくさかぶ陶を紙、近き世人の陶さの
しらよりひて言ぶるを読んで、九モノに、謝
たるまれど、絶いひて、賞しあるに、そも漢文にも

かくもあるべき、清少納言の文さへ、さうびのあとをまぢ
べきなるべし、なほ、もとよりのたぐひたる須磨の
よ、古代文さへ、赤ハ、中将なる人、或ハ、五位なる人の或ハ、
京なる人、ばかりなる者ども、官人、地名などに、
なるべきいひつまで、ハ、中将の女、そなる人、又、京よ
居るひと、ばかり、そなる人、名を在原
業平なる人、紀貫之なるものゝ子ども、別ハ、さらに
さ、さいひて、業平よりなる人、貫之なる者ども
そなるといふ事、ばかりなる事
事ぐさ、ハ、ばかりでいとみだりなるかへとぐ

かるべきなり、

○そもそもなる業ならんこと

今ハ世の人の文よたとへハ、京の人、大坂の人の書き
京なる業、雑波なる素なる事ハ、大かたなるべきなり、
ど、なるべきハ、ハの京なるべきなるべきなるべきなるに
他国の人の今ハ、京なる居雑波なる者なるに
字のまぢるべきハ、ハ京ハ、雑波の素と
事ぐさなるべきこと、かやうハ、ハ、のとなる、ハ、
やうなる、ハ、中なるべきなるべきなるべし、但し、貴

[illegible]

多知通低刀の際

○たゝらの河さき

[illegible]

[illegible]

○たゝらの

[illegible]

君は方よつきていみの語なる故よ、給ふなる、又君の、
君より物をたまはるといふは、君より給ふの方をつよ
あらびたる方よつきていの語なる故よ給ふるとい
ふるは、かくのごとく物よ、古記物よ給ふるを、
被賜と書たる、強ふるを、今垂人は、此を為なく
給ふことをも、給ふと西をいふはひがごとなり、

○給ふけることいふの詞

たまひけることを、なほけることいふは、中世より
はるかに後世にて、しき詞なれば、強ふるを、今

垂人は、かくまでおれを雅たりとおりのはひがごとなり、
又おれは、嘉後世にてなれば、給ふけることは、
うまれ。ふることを、物しとなりて、嘉後の言なれば、
用ゐべき詞なり、法ふるるとふるを、来ふと、

○法ふ、ふの詞

近垂人は、ふるべきを、法ふは、りの代をふるの時は、
ふるを法ふといひ、又、文をふるは、ふるを法ふ、
法ふふるは、ふるべし、法ふるは、ふるを、
けだしあるべし、法ふといふは、ふるべきを、

多くは、たゞ事なきを、てとりつゞきたるといひてハ
たゞ事なり、法くハ、はた事をさへ、ゆゑ深の事を
もしは、又はるけあるゆかの事もおもはゞ、やられ
法よ、用ゐ給ふ、又文よりて事をつゝしむ、或ハ
ちゞめ、或ハ法くまめ、へゞしたるハ、中くよろしく、

○法ゆゑ、法ゆゑ

法ゆゑと、法ハ、是も給ふ、たゞ、ゆゑ、
めけゞくして法ゆゑ、法ゆゑをハ、やるひとつもたていふ、
やうなる、法ゆゑ、法ゆゑハ、給人よりて、被

遣ふり、（俗言に使ふ）ゆゑ、給ふを、さて、今は人ハ、ゆゑ、
ゆゑ、法ゆゑハ、さるを、法ゆゑを、さて、法ゆゑを、
ゆゑて、さて、人ハ、事を、法ゆゑを、法ゆゑを、
けるゆゑ、事ハ、誤ふり、此頃ハ、さて、人ハ、
さて、つゝけて、例ふり、古き事ども、
ゆゑ、べし、法ゆゑ、或ハ、つゝけ、給ふ、
事ふり、扨、勝ふ、法ゆゑ、
はさて、ゆゑて、法ゆゑ、法ゆゑ、
勝ふを、法ゆゑ、法ゆゑ、法ゆゑ、

○てりぶたらめ語

必ずとりあつべきものなり。てりぶは、おろかなるものの語うまきく、
同じくらいの事あるに、壁ばかり、若造で、人ぶんよくよくよ
ばかりの喫人でもあるといひてはいかがならんかと、
此事ばかり、物をもとめしかども、又、文をかかるとも、で。
すべきものなり。辛抱してつとめ、辛抱してつとめ、
言葉を厳しく厳しく暑く事、初学なれ人の文を見
るに、中くよりひがちなり、合き物語るべし、
必ずおろかなる人、辛抱してもいとまで、言葉

おもしろ、

○てふ ちよ

少のよりよりの事を、奇なる、高ようでよりもひ第
紫ばかりなる、やはりなるは、とふの約、
又いを暑けるは、ばかりなるは、ばかりなる、
近きこころ古学は、筆、例のちひてふるかきんとて、
文をもよりよりのべきもの文まだ、抑まんて、皆てふ又ちよ
よりまいひよりのべるは、ばかりなるは、ばかりなる事と思ひてあ中
古はあれ文をまこと、筆人、おのよりは、殊よ実苦し、

抑、あれこれハ奇河なるあまた、又又いろ〳〵より例るに
事なるべき、古歌をもとゝして考へに河なるべし、中古の
ふるまひさまなり、但し、ふるき事ハ、たゞ人ハ、こゝ考
くてゝの河ハ、こゝなるべの、くて事ハ、きれ、ども
あれハ、あらくてゝ某と、定まりもて物ゆゑて、其物ハ
さてゝいへるまでハ、をべてゝ例まひ、ぐきあるべ、

○やと文る上け格

をべてゝやといふ河けとの文、宮まりもて格ける事なり、
壁へハ、花さるねといひてさたねるこゝにいとゞ新古

実河ゝいひて、宮河ふるこゝいとゞ、おあくこゝいひて、
枕あるこゝいとゞ、又あるもものひてあるもふるゝ、
垂しこゝいひて、自記。こゝいもゝ、ひけ格、古人を
おのゝ川ゝるまくて、ゆきく、ゆる事ハ、ゆゝ、
近き垂け人をけけ、ぢあをもゝ、ゝ考りゝ川ゝ、
ゆり、年けゝまあゝ、文ゝも、通け花ゝ、某山
ゆゝ、ゆゝて、ゝ誰も事、おゝも、おゆゝて、ゝ格
ゝるこゝあれゝ、ゝ上の河を文て川ゝる河ハ、河ゝの
河も宮まり有こゝ。ゆけこゝ河ゝ、ゆけゝを
河ゝ、ゆる事ゝ枕河ゝ、ひゝ川を出せゝ、ゆけゝ

[illegible]ほど、古人は例をよくひそめ、川ぐべきなり、さてく
やすりぐもあまたとかれど、二川のごとくいつも興ある
やうに、文を拾のてよはのぐ、かをもとに、

〇ともてもとつの句

あるともても、すべてもうどやうれとても、世ぐてふはの
きまりたるもうれをを後世まれてもはもに
あるで、別よひとりの句もてもてもこうつ事
いるに、俗てもよりてかのもの、ともてもかりれもよりてもいとのやしげう、新うどう後
べきもの樂よりうど、

〇やうもうつの句

とぐうは、樞の空れうなく、ひらき戸れうぐかを、
御ふを、葉はを戸ぐうど、ぐど戸はうもうは、
いうぐ、ものやいふあき新ふを見ぐ、仏浄
和ぐべし、

〇やひとうつの句

やひとうつの句、ものはの人、ものようとむ者て
ものぐも、古は、ものもうぐどうのひうぐもうを、

とひとるとゝ語るまみし、

○友だち　友どち

今の世の人、友だちとゝ俗にとゝ（サビ）ゝいふ
らん、多くは、もゝ、又友どもとかくもれ中く
るゝ語し、なきを集の詞也、又物語をどふも、皆
友だちとゝ、ゝ、友だちゝゝ、友どもゝ
とゝ、意をどへてどもとゝ、俗言な
どしとゝるなり、其言なるてをぞ友のゝ
ゝ、友どもとゝいふべきなるべし、

○はやみとゝの詞

はやみとゝ、俗言ゝ、はゝ早速、ゝ意、
とみのゝ、ゝ、極甚ゝ、
意ゝ、俗語ゝ、
速ゝ出来ぬ、ゝ、早速ゝ出来さ
いでゝ、ゝ、早速ゝ出来つ、
とゝ、ゝ出来つ、
ゝ、此日ゝ、今ゝ人々、此
ゝ、ゝ、

○やまとだましひ

漢書などをよくよくこゝろえて、漢人の語をけゝ、こゝろ
こゝ語をけゝとかくのみぞよくよくこゝろえ、ゆゑ語を
けゝとるべきつぎ、皆は文の宣はるまゝにけゝ、語をと、
此次の人の文をよくこゝろえて、語をよく又と
ゆへをとるべきつぎ、同じ言はをもりて、まげらは
しく、拙しくもあれ、語をよくぶべし。此
いひて、次の語へうけゝ、後世はのぶるにしら
ずくなれば、例をもてぶべし。のこゝの言葉

次の語へうつるがゝ、やまとだましひ
いひ、紀ひがよつゝ、をべてまき須の人、文をもと
ぶるゆゑ、類、わるゝ、怪奇なるべし、

奈介奴　祢乃は條

○なりぬたるゝ語

なりぬ。おりひるゝ、拙。おりひるゝ、

すぢ七の綱よりもまた、たるかたち、物お
りひろげたるやうなり。されどもとぐちをば、
ほそく、ひとつにくくりあつめたるまうけ、
暑けれども方角をば、なほ、
集よりとあるとうたがひもなく、なんぞ
も、まぐてすのきつてとるものなれば
てふぞうね羽をのべり、

○うぶとりの絹

うぶは、俗言なれども、成さうもなきやうなり、

きどりあるあるかの、物を、ひとつ意ようう
後はまるまり、ふ、殺だうるあるもとと
ようとよきもこれまでもまるをもくく
まるとうるよ近くるやうはもれん
初るあるくしかてらよくはもれ
をきまるまりあるもあるもはもいい
実ようるは、毛無よりはもるはは
同ぐるし、

○中まとつの絹

[illegible]中[illegible]中[illegible]
男女の[illegible]
[illegible]
の中[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
中[illegible]
[illegible]

○[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

○庭[illegible]

[illegible]庭[illegible]
[illegible]

まもり、ゆるべし、

○庭りせとり

庭もせまきをとりてるやうの委しく、畳りせ
の変より人足、

○はきとり

のことハ、はぐ、こと物をるやうにはらく、外の乱
外はるすの時ばらはらはいと掃るをくまき頃の
人の文りまハ、こと言るまで、はぐ語の勢ひなのこ

はいはいもぐもるまれ消きハ、逆文なるとへるひぐ
おとるまで大うる空国の語ふハさやうまたこいはく
少ぐもむる例をまきるやうり、合きこ舞ふ、はぐ一枝
はきこ、はこ一人はこうぐ、ぐはぐもるあれと、おこ
ちこ、一枝はかぐこ、一人はかぐこ、二つるはこいる
まこく、はぐ語の勢ひはこ人はこうるはあうる稀ハ別
るまり、

○野りせ

野りせハ、野も狭きこ、掃はこもはこうるこハ、庭も

世、座も狭きまぐ、うち出さるる人、なまぐ、
野よ、座よりの人をも、野もせよ、はりもせよと
よもいひづるまるうへ、もを面けをもかぶるる
まわ、さてきせりぐ、何はなりとなん、

破法不斷保の條

○さてく世にいつの間
花よ、菊さてく世にいつの、寒く菊ていさるも殘り
まれ意、魚は舞まどよ、絶えてくるはの、金く
絶えくいさてかもかるるまきてるるの、長べてさてく、
も、右はでるき意をいつべき時よ、流てる間雪は、
る意人を、きぐ、菊て絶てとのこいのさてよ紀変
きも、間は世ぐ絶ば、菊さてく、絶えてく殘ばさてく
世いるてくいづるまり、

○書状返事のこと

書状返事のことは潘文さまく全国注意
なるべきもの、なべてもかるべきは俗語なるを来る人京を
或は玄関或は門或は里の人口ずさまぐ言て通
ることこゝろいへ書ぐ居く絡文をバもかるべき
いとゞ絡まバ書弥書をも門口又は里人口ずぐ
まく紛て通る物なるべもかるべきは書バ
書ぐ来るはこゝろあまさやうなるもかるべき物なるあら
ぎれなどより駄文貴賤通春なるべあるべ潘文なり、

まべて、駄文潘文は格なるべ多は書、其文案は
はなるべはよるべ和なるべまの書を通なる
はなるべは後世俗語なるべいひ新なる文なる
見は書なるべ古なるべはなるべくいなるべなるべ
同じなるべ兼は新なるべなるべなるべ
なるべなるべはなるべ来なるべ書を送を通なる
なるべなるべなるべ物なるべ趣意なるべ
書あるべあるべひあるべくいなるべなるべ
ぎなるべ八俗なるべいなる支度なるべ何なるべ
弘なるべなるべ送なるべ書は来なるべなるべ

やうにいひあらはしぬべし、秋は春の知る事なれば衣をぬぎかへ、
実は春は春の衣をぬぎかへ、あるべきを、人の衣を
ぬぎかへるなどとよめる趣意、いかにおもしろ
うあるも、是をぬぎかへて、春を知るべき秋の素きる
事をうちまもりて、春をもとりつるかの素の
実はうちとけて、うちまもりて、まがの素のこ
ろもをぬぎかへるといはんがまことよくかなへるべし

○歌のことばはうしろ

千世の人はうしろとなるべきもの歌なり

なかれん
はるかに網代川の
春のあけぼのの
まことにこそ
神代のかみのいにしへ
いのちまもるべくて
秋ぎりの
きてはを

さうし物がたりは少しあれども
ものしるべきは歌なり、まことの心の
ばかりあるべきなり、何ともやを世めきてい
く実ゆゑ調まり、

○春の歌あれん　春は知るべけを

かなるべき春はきてけり秋を知るべけれどあるべき歌
を、初学はものがたり、詞のえんなるをもとむる
春のきわれん秋のきわれんもいとかしこ
けれどらんとあけぐめるも、知るべきなり

古本ほまちかりの三月
の歌にはづかしづくし
秋八きさらぎ
みやぢもかぜも
白雲もみなに里に
春ぞきにける

せんこうるけるまでだ、おもしろきよくよきまへ法べきほどの人とをかしくはひがおもふ、いつるよりや、春ハおもふ俗語よ、春ぐ来ることはいとりつるでの意ハ、春ぐ来ぬ春をまぐ知ぬ人をまぐ知ぬこころもちくれとりつる意なり、法ちよ春ぐ知ぬこはいやいつのべき所をまぐ知ぬこころもちくれとりつる意なり、法の面べしやよくかりのべし、

○法ちといつる詞

千世人、奇の詞也ハかるこど法ちといつるを

えへぐまで、雅言よりぐるやうもひかるべ、
もちくの時ようこ法ちもちぐの所くようこておもと
法ちこまでまハ、ちうれたれ詞しまぐ知ぬ
ちべるとつる詞法ちべき文也法ちふまぐ文
とあるこ、こ考りまハ、まぐ知ぬ、其ハ法ハ全
別て教ひくいつる法のうちはこぐうこ人よつきする
ちよ法くいつる詞ちよく、屋の意也法ちて、
よみ法ちといつハ、俗語よ、屋の意也まりてよこ
まりてだきうまもとつる詞ど、法ちハ法ハ俗
語のまりてつるハまぐうまもとつるよ、あるまり、

さるれば人のもとよりいひやる文などのかたちもいと
べし、重ねて砂ごとにさもあらぬ文は
まことにひとつもとどまるあらじ、拾遺を世乃
人はまことに何はきまへもなくこそなどいふ家
ばかりに、賀ぶ奴僕などのもとひて花をたまふ
て、読まして、ぞうもとといひ、又ひとかつの張
ふも、紙いとんだまどうかたどもを、寄せ
詞書のこまごまとして、何はなにとも右はなにあるる
べきこまかなる、古き物語ども、をべて、此詞は人と
人とに、語る語の詞なれば、なるべきうて、

多くあり、て、なほ地は語、又は我よりトさ海なる
もの、奴僕などに対して、張などこそ、此詞も
ならるべきなれば、よくくこれをつけて考へべし、抑近
世人の此詞をみだりにゆるすは、代々は撰集
乃詞書などにも、ひがおこなり、撰集は物語
書物なれば、撰者は、かなに対ひ、ありてやはり
ひがごとをなりつて、此詞をば、多くおけるあさは、
古今集の詞書などにも、後撰集などに、
いかなれば、其中に於遺集は花山は常は自
撰なるもの、人のさてまうさるべし、

おのゝ、やゝ〻ちさき世ひとゝせ、ふたとせ、ほどあ
らん、ひとゝせ、ふたとせ、ほどゝまりかし、又新古今集、後
島羽のみかどゝ、ゝ、自撰のぞくゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、此
河ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、

さて、家大人などの事やうに、ことあるまでもきこえ、
格、名にもせ、そ人をもあまたてせらるゝ格、上
もすべし代のようやましひてとも、名をとゞめすべ
しなどいてて、古学はたゞ今人の名を
ようやまに、なりしに思ひぬべかめれど中古よりとこそ、
まぐれ人の名とも、もろもろ世格のおとゝ、
あれをようぜまぬなりとすべきあり上れをへく
の宣まりにあれどもまた上代のちやう
まいひごき事なり、

○ものみぶのようのすべ

こゝのうち世弁をひぶてひまぶのうの宣とわと
さもいうべあれど、宣とも、神代の事にひまぶ世
いぶのう紙、遠部はあくにひ事とくたまと紙
おもものいあれど、かのひまぶのようと、
別事まく、遠部はあいるものあべ、

○経（フル）舊（フル）

を事、経と、舊とまぶまく、遠部と事はいし、

壁言は、年久しくして、稽古好学
者、ひとりのみ、ならず、家々に、
家ぬし、あるじ、ありてとも、ものしり
なる、ものしりの、ものしりの、
いひつたへ、稽古、ふりはなれ、
ふるとも、ものしりの、ものしりの、
なほ、ものしりの、ものしりの、
かたりつたへ、ものしりの、ものしりの、
いらひて、日数、ふるとも、ものしりの、

べし、

○文は詞を本とす

同じ雅言は中よりも、文章より用ひて、本末を
きはめ、壁言は、文をもつぱらとして、雅言
よりも、詞を本として、文はつまびらかに
よき詞ども、水蓋、玉づさ、島は歌ども、詞を
文とつくる、武はまづ天のさとりを
やうに、物を語るつもりにて、こゝろを
本とす、ふることは、をしてこゝろを本と
なし、ふることは、をしてこゝろを本と

いろはとしてうたを、文章ようの物のまとゐなど、古乃
よき歌ゐ、をさ〳〵ゐ、辛くゐ、ゐ、ゐ、

又、例ハあれど、皇國のいひさゝゐよりあらぶ、初めの
おとゝ、やまとのいひて、年ゝ、ふる川、三川あるふ
るまよりあるもの、隣ハふる川の国、又の指とゝへど、国
ふる川、指みつゝとゝまあらぶ、又寛政のころ
はやしとゝへど、實ハ政とゝ人の、三業はきこゝる
国ゝ、ゝゝ、ゝゝ、二年三年ゝ、皆ふるゝゝ也也
いはやし、ゝとゝせやゝゝ、ゝゝあらぶ、ゝ、又
もゝ、ゝゝ、ゝゝ、いつのゝゝとゝ、ゝ年ゝゝ也
也ゝゝ、ゝゝ、ゝゝかゝゝ、ゝゝ、ゝ国ゝ、ゝの
いひゝゝ、

○沒ゝふ火

螢ハ、初学ゝ、ゝの、ゝゝ、ゝゝ火とゝゝ、ゝ螢、
ゝゝ、蛍文ハ、螢火（ケイクワ）とあふ字ハ、ゝゝ、ゝ、
ゝゝ、ゝゝ、ゝ、ゝ、

第叁年兒毛

○まことしやの詞

まいん、又ながき屋しきとて大きなる屋しき意
ちくせまいぜん、又、そばきものべしの意、いは
まいぶそん、又いとのべきいとのべしの意、すべまし
物をば、すべん物をば、又すべき物をの意なり、古
今集のうた、
蔦の谷といひし色めくべきまゝに秋雖
うちつけまことあるを、言くるまことを、詠人知

又、そもそもこゝにきけ意なり、俗言よりぼで、誰の御ふ
今の世、初学の学、れ泥くゝを渇りてまだ読、
不付意と心ひてせぬといふを、せまだいふ、
いまだまだよもいまだきひがおもふ詞、
を意なるべ石の京今集の弁は結句なる
ちまでいまでいまでいまでなるべ、紙いひて、
いやしきと詞なり、よくくきまつべし、

○まもせしこの詞

わしまもしこるどいつべきを、わしまもせしとつる、

[illegible]て、坐し、皆、まゐらせ、[illegible]例、[illegible]く、
まゐらせ、俗、[illegible]り、

〇まゐらせ[illegible]例

敬ひの詞、たまふ、[illegible]を、素臣以前の文
[illegible]坐、[illegible]、来、[illegible]、来、[illegible]
入、[illegible]、入、まゐ、[illegible]、[illegible]
[illegible]、[illegible]、[illegible]
[illegible]、[illegible]、[illegible]、[illegible]
[illegible]、[illegible]、[illegible]、[illegible]

[illegible]、[illegible]、[illegible]、[illegible]
[illegible]、[illegible]、[illegible]、[illegible]
[illegible]、[illegible]、[illegible]、[illegible]

壁に蔦はかれるよ雨のきさらぎひわきさらぎふるど
いつゝ雨のおきさそふおのづから蔦はかれまづふる
まづくまづふるやつゝ雨はれまづいもるゝ雨ふる
おのづから絶えておやまとしもやうる
いつもの若葉あらるる世の人をたまと
ひかりよりひかりて深うるしし、

○きりぎしはけうひざる

風をつゝ雨を絶えそぐ世のぞ八俗
世をつゝ雨ふるる風ぐさよさる

雨がはるるよ風がはるるよりさりて
あるもるはるは意ふるおめぐ、をきる世の人はぞ
はるひぐはをはるきる人をぞ或を月清く月清き
ぐるつぐぐきををみぞるよみをるみ年松沼
ゆるぐ、

○こゝのいひ海ある河のうち

壁ばは花よ さくさけるはる ちるちる
雪よふる ふれるふる 鳥ぞよ なくなける
ふるぐるつぐ、或を、あふるあひ

おりゝ折りゝ折もひし折に折る折に折る折に折る

譬ば古人はかけるものゝ
今こゝに出る続を作る人
又こゝかけるこゝ人ゝ
昔いひし昔のゝ
いひしいとゝべし譬ば古今集は序ばかり
そのまゝ人ゝ此序は近代の清代又異之
はつまるゝとゝべし又はもうこのゝ
また人ゝ近代の清世又異之の世序出し時成ハ
かきそゝり時ばかり極をき世代人
まべくこゝのけだものゝ古今の序ば異之の

かきゝ文ゝ人ばかりゝ
人はゝ人ゝ
ばかりゝ
ゝ人ゝ
は人ゝ
ゝ
ゝ

○月ゆゑ　月にて　月をゆく　月せく

月ゆゑ、月にて、はおのづからうゑ物をいふ詞なり

月をゆく、月せくを、極くしもとるゆゑ、障子に風を吹

晴く、月のさわるあるをいたんでさわる月にて

やうつゝ、月のさわるゆゑ、月をおけまをいふ

まく、風の雲を吹ゆくるゆゑ、おの

げうく、物をつゝみをいふ詞なり、月をせて

ゆくつゝ時に雲を吹ゆくひて、風の月をあらう

月せゆくを、月を風があらう、月を風があらう、北をぐひ

何方よりいひくもよき時を、月ゆゑ、月にて、は方、大

やうよりて、はじめやうより月をせく、は方を、花

やうゝは、ゆゑ、月をゆくは、ゆくは、ゆくは、ゆくは、

物をゆくを無人を月をゆく、月せくを、ゆくを、好む

物をゆくうゝ、趣をゆくゝ、ゆくをゆくゝ、ゆくをゆくゝ

○こゝ知らるゝゆゑ

こゝ縁とゆく、用もゆゑ、御ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、

○こゝゆゑ、月ゆゑ、月ゆゑ、月ゆゑ、月ゆゑ、月ゆゑ

[illegible] 野 [illegible] 倫 義 [illegible] 野 [illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

○道ゆきぶりとは、

春は[illegible]

白雲は遠き雲

[illegible]

道ゆきぶりとは、道すがらのひまあらばとなり、

俗にいふ旅の人はらひ、旅を[illegible]、旅籠の日

記ばかり、俗のつねなるべきことなるべし、

○もろこしの和

もろこしにまさるくにぶりの和歌、[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

○もぞ　もあう

きぐ　ぐ　ぐ　

物語は、今世の人さへ、心ばせ
思ひ入れ、ふかくなさまを、思ふ物語りとは、あれ
ば、ものいふべきさまを、あらめ物語りやいふべき人を
おほきさ、世でかくとりつゝ同じ意味なる語を
なかつて、世でかくと物語りは、大なる、うつくしう人の
たくびなるを、物、世間を、奇ふも物語の道なるべ
ふも、第一おほくて、こゝろ意まさるべくよりね
視なるに、今世なるを、奇をも、文をよく読、よく
かくとおもひおごれる人も、おほく世びたるあるを
いかくかくるべきかは、

○そのうきやの方

物うきを、俗は、ふびんなりとて、行ずにもせよ、とする
事は、いやなる意、ちるまきるの意なるの、物語
を世人は、世で、うつくしきものは、心物をもるや、
うきものは、べきさまを、心物をつくるたぐひ、
おもひかくるを、世人今第一、物語は、物うきは、ぶ
数寄をしるも、雪のひかりをふるで、世でいさ
さらば、数をいふ人ふるく、俗は、いやさうよ、ものも
まさうよ、ふせうぐよ物語りの意、文をのうかる

初く、雪ぞ降くと添るもいやさらに、雪降るまさ
うまくあるとあるとい、雪降るまさ
ぬべし、

○文字あまり七句

又文字七句をたりぬまに、七ぢ七句をたりぬ
よもぎ生そ、さらに句はまるもあいうおのうちの
りぐあるは時とかぎるちやうの、鶯ぞ鳴
あしぞ須賀の浦は 花はさきぬいつる
いせはうらや 月はおやそ いとそ

文字あまりの句
ありそはの浦まかき
見そかけくあれ、
いきもきたのはを
ちやうは、
鶯ぞ鳴
又ひしぬ
水のうちあも
うれ、

竹はみる時おうい、七ぢ七句もるぞうへて知べし、梅
かく、ちと葉ちうるう、此格ときはなる事也
なきくあるきを、新古の頃ていうて、西行法
師うぐ、おもをを拾して、ぞうく文字はまるる
句を、拾はくよりまりをきたるりて、
拾は、右は格くはなるちと同ぐうき
拾ひり、格、古き歌六八ぢ句を七文字入
きたのくあまりてよりあるをさんふまりにあまるる
うくあるあまりまる二りぢかりぐるぬぞし、
まりる、古々集ちて、

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

○[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

花やりみちまで梅や柳まで、やはりどうやら
しき河すり、蝶やもるやうにひらひら、
ちる蝶よ花よといつとなくまでおちるのさる故よ
やりどももあるに、絵ゑの花やりみちまでのこバ
こゝ言ふにあらで、花、又ちりこちらに言ふれだ
やりかへさるうり、

○付け数のちやり試れこゝ

なるつよいかをいく事に、あるれ
ちよかりをわくこと、ちるうりこ、なるの

いづまろ、判れたる、まどやうくいけくとおき、
又中よ、河を流てもおくるのすれつづけて拾
かりこゝ、今は世ふあと、をきく語らるはまきを
中ゝ河を流てもおくかすりを、語るのてや
りを拾くるの拾りゝ、壁ハいろるることふつなん、
判れたる。けんまどらるべきまいるるこゝや
けんれたる。けんるといい、又いくと月ち。
ちめる判ぐ里よりうつきめんまどいみべきを
いく年月を。へめる判ぐ里ようやきあらん
まどうつるやうれ拾のやゝ、皆、ひづまとるる、

なき歌文をよんでうきまぎれしをき世、
おとゝよひ湯和りして、何うまで出まがりいふぐ
まと、そのりをねくを時、そもそもようとこと、
そけるもそいづくふぐやうどやりどをおくもく
あるとあまもを、鍛ひのやまあびよよ西ひて、
いふぐよりうもうの用ぐけまぐ別るまう、又、
いいげるやいるやるどやうどやも、鍛ひよ
あるどどぐやけやふぐどと、おまるまりひまぐ
るくあやまるすまる事、

○やらあるらの絵

寺よりへぐ、京に消やるあるらあるまるるて、粧
寒きるる、雪もまやく消るるるゆ中粧りへども、川も
るくはるあるる、花はる咲やるあるらあるる、早くさけし
山紫も咲あるれおるる黄、道をるるやらるると
いるる、早くゆるもるるるるるるるるるるるるる、
やるるの黄るるる、やるるる陰かくれるるる紅るる近
世人るる、声るるるれ粧きるるるるる雪れ消るるるる花れ
咲るるるる道をゆるるるるるるるるるるるるる、

家　やぐて

或ハ、花ハ、まさちでつゝを、数ヤ、なゝ、ゆ、
月ハ、まゝ、ひゝ、ゆ、ハ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、
ひゝ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、
ゆ

ふること松浦さよひめを、文と、
ゆかしく、ゆもしらぬ事どもいとをかしうでうらうらひかく
ぶき、

○ゆ

ゆもとゆてゆを、弟繁子ど此弟兵ゆもよ。
ゆる松浦ゆ、おまてよりて、手き須の人ゆ、
ゆもとゆてゆべきゆを皆ゆとかくを見ゆし、
弟ゆ有ゆ、文兵皆ゆをとゆひて、ゆもゆ
ゆゆ、ゆくゆゆ。

○ゆをゆとゆる

ゆゆゆの海をとゆて、ゆとゆゆ同じくゆとゆきゆて、
おゆゆゆてゆゆきゆゆゆの海ゆゆゆゆゆゆゆ
べゆ、海ゆ此ゆゆ、ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ、

○ゆゆゆゆゆゆゆ

ゆゆの海ゆゆゆゆゆ、ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ、
ゆゆゆゆ、ゆゆ文ゆ、ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆ海ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

海といつてもあつぶたつけ海とてもあけよりあるきとるなるぞかし、

○よるてとらつてるの

よるてをこのるのようなるて空上れ河者こ河ばけいつてとるう河れ所よりぞ上れてとらつてるのようし

そ、上る語を八切てけ語をやらてとらつ空、あれよるてといつべし、聲ぞ、とよるれけばけいつ時を、日もとれあるようるてやどりあどらつを、よをかていつてきたりもとれあるようりてや

ぞりぬよりきぞひきう、抜うををを氏のひとを、日もとれぬよりてやどりあどやりよ上れ語ぬきを、きるけるよりてとらつを、淫文ぶりれひぞるて、清国の河法ぞひよきぞ人、

良理留礼呂れ除

○ろうぞきらあ河

壁を、すぐる水かくる月同ゆる色すぐる
月日などつかうまつる初学の人を引る水皮の色
すぐ月日など無くよ清きもあり、さてもるりだらで
語ゆくこのもとに、万葉よ、なぐる水とあるは、なぐれ
格にて、後の例まれ、あぐ、はさらく又、
此歌は中よる。はは字いうとるまきとるて自化は意
かるる河もれ河、壁ぞ、やく紐とるる、紐を人
ぬるまと、やまとる紐とるへぞ、紐はおのげうる
るるる、又、やまり烟とるへぞ、烟のおはげうる
去ぬ、やまりるけかるへぞ、烟を人はるり
るるり、

○ふよ結ぶ歌はるるめる
たるはる

河をるるて、下を川るるるべきとぬるるべきとは、
美別あり、壁ぞ、あるるるる河のるるぶあり川る
ぬるるこのもて、百あるるるるるるるるるる尺
川ふ、ゆ川るるるるるるるるるるるるるる
苗、ふるるぞ、ちるるるるるるるるるるる
川るるるる川るるるるるるるるるるるる
みるるるる河るるる、又川るるるるるるる
よるて、ゆるるるるるるるるるるるるる

ものとおもふ、をきな世の人も、あらかれぬときは人生
ちからびみをるうるゆゑ、ことのべきをぬるとおもふ
るゆゑ、猶ものをおぼえまうほ、大かた、初学は少まうぶ、
学ぶものをば、ちからをおもくして、皆、めるふ学
問又学ぶ或をけることをひてよきものをいまの
人をおぼえをしを味をちからに皆めるるの人あらか
古井のものよ仙をつまて、常をよくえ学ぶべきこと
例をあらんきまり、

歌文用例

畢